九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

広瀬淡窓と老子思想

杜，栄
九州大学大学院生

https://doi.org/10.15017/18190

出版情報：中国哲学論集. 26, pp.73-90, 2000-10-30. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

広瀬淡窓と老子思想

杜　栄

はじめに

近世後期の広瀬淡窓（一七八二～一八五六）は著名な教育家、詩人、儒学者であるばかりでなく、当時の有数な老荘学者でもあった。彼が著した『析玄』『老子摘解』は老荘学の重要な著作であり、日本思想史に重要な地位を占めている。

淡窓の学術は古典を承け、さらに各学派の観点をも吸収して形成されており、折衷的な傾向を帯びている。淡窓哲学のなかで、敬天思想を中心とした儒教的合理主義以外の最も重要な特徴の一つは、その生き生きとした老子観と老子思想の運用である。淡窓は老子思想に対して独自の詳細な研究を行っており、老子思想を「数」に帰結させ、その上で自らの「制数」思想を提出している。また鋭い哲学的洞察力で、老子思想と儒学との間における思想来源及び研究対象のある共通性を発見していたので、両思想体系の間に自由に出入りして円融的な解釈をすることができるとして、儒老一致を提唱したのである。このように儒老両派の哲学にわたっていた思想及び哲学様式は、近世後期における思想界のなかには、他にあまり見出すことができない。だから、淡窓の老子観及び淡窓に対する老子思想の影響をつきとめることは、淡窓研究に不可欠なことであると思う。小論は淡窓の老子観及び老子思想の運用に対する初歩的

考察を行っていきたい。

一、淡窓の老子観

淡窓は若い時から『老子』を好み、老子思想を研究し、且つこれをもって自分の修養の指導思想としていた。淡窓はその自叙伝に当たる『懐旧楼筆記』のなかで、「予十九二十ノ間、独居無事ナルニ由り、秋風庵ニ在リシ老子国字解[1]ヲ取リテ、数遍読ミタリ。此レヨリ老子ノ学ヲ好メリ」（巻九、一一二頁。『淡窓全集』上巻。以下『淡窓全集』日田郡教育会発行、大正十四年～昭和二年を『全集』と略する）と述べている。これは、ちょうど淡窓が病気のために亀井塾から退塾して日田に戻り、初めての療養生活を送っていた時期である。

淡窓は生まれつき体質が弱く、一生のうち幾度も病床についており、その間は勉強と仕事はできなかったので、非常に養生を重んじたのである。また勉強のため、学塾での授業も静修しなければならなかった。だから、老子思想の「主静貴柔、処下不争」の観点に非常に賛同し、『夜雨寮筆記』には、「予少キヨリ多病ナルヲ以テ、養生ニ汲々タリ。老子ハ仙家ノ祖タルニヨリ、養生ノ訣ヲ得ンカ為ニ、此書ニ心ヲ留メタリ。因テ其旨ニ於テ頗ル得ル所アルヲ覚ユ」（巻三、三十五頁。『全集』上巻）と述べている。また、『六橋記聞』にも「老子の書は、寿福を養うの道焉に尽く。其の他は則ち我れ知らず[2]」と記している。これは淡窓の『老子』及び道家の術に対する関心と研究が、養生を重んじることからはじまったことを説明したものである。

淡窓は文学や歴史を愛好する家庭の薫陶を受け、幼年から勉強及び長期療養を余儀なくされたため、柔和内省の性格が形成された。だから、「無為不争」を説く老子思想を気に入ることになったのはあたりまえのことと言えよう。淡窓は、『自新録』のなかで、次のように述べている。

予が性は柔懦なり。弱冠の時に当たり、老氏の書を読み其の柔を致し静を守るの術を観、大いに好む所に苻す。是に於いて二十年来の行事、皆此の中より来る。水の益々深きが如く、火の益々熱するが如く、其の勢殆んど救

ふべからざるなり。（上篇、一頁。『全集』上巻）

工藤豊彦氏もその著『広瀬淡窓・広瀬旭荘』（「叢書」【日本の思想家】〔35〕明徳出版社、一九七八年）において、淡窓の老子観を三つの時期[3]に区分し、その形成と変化を分析している。そのなかで、淡窓が若いころから老子に心酔した点について、学統の影響と環境乃至彼の自身の性格の二つの主要な理由を挙げている。学統について、氏は、「淡窓がその若いころに、諸子学の研究、わけても老子や荘子の学に傾倒したのは、南冥父子を媒介にして、徂徠学派の感化によるものだといえるであろう[4]」と分析している。淡窓は亀井南冥、昭陽父子に師事し、しかも亀井父子は荻生徂徠――山県周南――永富独嘯庵の学系に属しているが、この学統は古文辞を提唱していたので、諸子学を重視したのは当然である。淡窓も「吾が［学］は［諸］子自り焉に入る[5]」と言っている。また、環境による影響及び淡窓の性格について、工藤氏は、「淡窓は豊後日田の豪商、博多屋の長子に生まれたのであるから、経済的にも豊かな家庭に育ち、その上父母の限りない慈愛を受けたのであった。加うるに、伯父の月化からも非常に可愛いがられ、幼時の数年間を、秋風庵に引き取られ、月化の膝下に愛育されたほどであった。（中略）若いころの淡窓の性格は、柔和で物静かな内省的傾向を持っていた。それゆえに、無の哲学であり、謙下不争を説く『老子』の思想に強く引かれていったのは、至極自然のことであったと考えられる[6]」と分析している。

淡窓は青年期において老子思想を学び、その上老子の術をもって自分の修養生活の指針としていた。このような状況がずっと中年期まで続いたのであって、老子への傾慕が淡窓の一生に与えた影響は非常に大きなものであったと考えられる。しかし、青年期には、淡窓の学問体系はまだ形成されておらず、かつ各学派の思想に対しても分析、研究、整合及び折衷する段階にあった。また淡窓は漢詩文の創作に力を費すことも比較的多かったので、老子の思想に対する評論及び著作はまだ行なわれなかったのである。

中年期の淡窓は、帷を垂れて業を講ずること二十年に近く、咸宜園の発展も十分に壮大なものであった。塾主、塾教師として、塾生を教育する立場からは、孔孟を尊敬し、老荘を排することは当然である。かつ淡窓自身の儒学的基盤も打ち立てられたので、はじめて儒家の学説、たとえば仁、義、理、智、信、誠、心性、中庸の徳などの信条を重

視し、そして努力して実行しており、それと同時に、老子思想の義を絶ち智を棄て及び人倫を廃棄するという「為我主義」「出世主義」に対する警戒心を持つようになった、更に青年時代の失意、いわゆる修養を誤ったことを、すべて『老子』を学んだことに帰してしまった。このために、淡窓の老子観は変わり、老子思想を排斥し、老子の虚無主義や綱常名教を廃棄する観点に対して激しい批判を行ったのである。淡窓は四十三歳（天保九年）の時、処女作の『自新録』を書いた。この著作には、

伯陽の術は、剛を以て柔を用いるに在り。是れ綿の中に鉄を裹むを謂う。予れ乃ち柔を以て柔を用う。失う所以なり。（中略）今自り以後、務めて聖教に服す。剛柔動静、唯だ義に之れ比すること。猶ほ大過無かるべきがごとし。（上篇、一頁、『全集』上巻）

孝友忠信は、人の大節なり。猶ほ屋の四柱有るがごとし。柱を建つること固ならざれば、則ち屋傾き、節を執ること堅ならざれば、則ち徳流る。夙昔に邪説の蠱わすところと為り、虚無因循を以て意と為す。其れ四者に於いて、汎乎澹乎として、猶ほ紙を以て柱を為るがごとし。屋、其れ頽廃せざらんや。昔、王衍死に臨み、始めて清虚の害為るを悟る。予れ未だ死に至らず。請う、今日自り之れを勉めん。（同上、二頁）

と述べられている。自分が以前の『老子』に対する認識及び自身の修養に極めて強い反省と否定を表して、老子から儒教聖学に戻る意を表明した。また、『再新録』には、次のように述べている。

首め誤まりて老子を読むを以て柔弱を言と為すに失ふ。是れ亦た其の末を認むるなり。伯陽の学は、楊朱我が為にするの祖なり。柔弱を用と為し、専ら自私自利由り来たる者なり。苟くも其の私を去れば、則ち柔と雖も必ず剛、弱と雖も必ず強なり。聖人云く、「仁者は必ず勇有り」と。力を仁に用いれば、安くんぞ其の終りに賁育に反るを為さざるを知らんや。[7]（第二頁）

要するに、淡窓は正統儒家の立場から、剛柔の関係を分析し、剛健中正の観点を堅持し、老子の柔術、「為我の害」を批判した。また一点は、淡窓は自己の身分と自身の特質から、自分は柔弱的な地位にあるので、柔術を使用するのは、非常に不当であると認めた。

この時期に、淡窓は自分の敬天思想を打ち立てたのであり、天をもって万事万物の本原及び自分の哲学の本体とし、かつ政治倫理学説、道徳心性論、修養論などの方面にも拡げていった。この時期の淡窓は正統儒家の立場に立っていたので、『老子』に対する正面的な評論は行わなかったのである。しかし、注目すべき点は、淡窓は『老子』を排したが、老子思想を完全に否定しなかったことである。『再新録』には、

老聃曰く、「仁を絶ちて義を棄つれば民慈孝に歸る」と。仁義は世を憂ひ民を救ふなり。孝慈は其の老を老とし其の幼を幼とするなり。之に由って之を観るに聃の学為る我を主とすと雖も未だ倫理を廃せず、骨肉一体分析すべからざるを以てなり。若し骨肉の際において猶ほ自私の心有るが如きは、是れ未だ老子の徒たるをさへ得ざるなり。……幼時物氏の説を狃れ聞き、志、経済文章にあり。正心修身は之を高閣に束ぬ。稍長じて老子を喜び、専ら収斂し自ら了し、而して物を済ふの念亡ぶ。是れ我が一生失脚の處。抑抑伯陽は孔子の畏るる所。物氏も一世の豪杰。唯我が学の方を失ふのみ。咎めを古人に帰すべからざるなり。（同右第三頁。）

と述べている。淡窓の老子思想の価値に対する見方にはやはり保留したところがあるのであり、同時にそれは老子思想を深く理解していたことを説明するように思われる。

晩年にかけて、自分の学術研究の深まるにつれて、淡窓は老子に対して新たな認識と評価を始め、多年の研究を集めて、『析玄』（老子の玄旨は制数の二字に帰することを明らかにした論著。天保九年、五十七歳の著である。天保十二年刊行）、『老子摘解』（『老子』中の二十一章に対する解説を行った著作。五十歳以後の著、嘉永二年の刻本がある。安政三年刊行）、『読老子』（不明。註（3）後文の説明を参照）などの老子研究の専著を著した。『析玄』の著述は、淡窓の「敬天説」が成立した十年後のことである。『析玄』の成立について、『醒齊日暦』には、次のように記している。

予れ此の作に志有ること久し、今、厄に遭ひて懼れ、因りて宿志に従ひ、竊に羑里に易を演ぶるの意に倣ふなり。書の成否は未だ必ずべからざるなり。故に其の始めを掲ぐ、庶幾はくは其の終を成さんと云ふのみ……。[8]

『析玄』に、「五千言（『老子』の書）は、用世の術なり。後人、善く之を読まず、専ら枯寂の談論と為す。其の妙

用隠るるなり」（第二十八則、『全集』中巻、下同）と論じている。ここで淡窓は再び老子思想を「有用の術」と肯定して吸収することになった。これは淡窓の哲学方法論の形成において重要な意義が持つと思われる。淡窓は、『灯下記聞』に、「析玄は、数を明らかにするもの」[9]と言って、また『懐旧楼筆記』に、「大意老子ノ旨、制数二字ニ帰スルコトヲ明ニス、是古人未発ノ説ナリ、内ハ己レカ身心ヨリシテ、外ハ天下ノ政務ニ及フ迄此二字ヲ以テ、之ヲ処センニハ、当世ノ要務之ニ過クルコトナシト思ヘリ」[10]と分析して、老子哲学の要を「数」そして「制数」と捉え、個人の修養から政治に至るまで「数」を運用するのが、処世の要務であるとする論理を述べている。だから、老子思想に対して深く研究、理解した上で、これによって自分の独特な哲学概念―「数」及び「制数論」を提出して、しかも自ら「古人未発の説なり」と言った。そして『老子』の存在論思想を自分の哲学に導入したり、天本原論及び物質生成論の不足している点を補充したり、その上に、融通の方法論及び形式に拘らない認識論をも樹立したりしたのである。淡窓晩年の著作及び思想からみれば、その老子思想の造詣はもう円熟の域に達している。『析玄』末則には、次のように述べられている。

漢籍の我が邦に伝う、斯に年有り。儒説は黍稷稲粱の如し。……玄門の言に至っては、常の形無く、定まる勢なし。苟も其の要領を得れば、即ち施して可ならざる無し。

ここで、淡窓は極力『老子』の価値を肯定し、その社会にむける用途と可能性とを指し示したのである。淡窓の生涯における各時期のなかで、その『老子』に対する認識と評価は、肯定から否定へ、否定から再び肯定へという過程を辿っている。それは淡窓思想が論理的に発展して成熟するまでの過程を表現したものでもある。

二、淡窓の老子解釈と運用

淡窓は『析玄』のなかで、『老子』の主旨を分析した。まず存在論から老子の「玄」を説明し、「玄は幽昧不明の謂いなり」（第一則）と言い、「玄」或は「道」を一種の存在として肯定した。「玄」の存在は「無」という方式によっ

て表現され、続いて両者の相互関係から「無」と「玄」の存在及び表現を論証した。『析玄』第二則に、

玄は宗とするの者無きなり。無は神明の徳、造化の機にして、聖人之を象るなり。無は得て言うべからず。已むを得ずして之を言う。

と論じている。事物の存在の様態から「無」の存在、その表現を論証し、玄の「変化不測」「不与物争」を「無の用」に帰して、体用関係から「玄」と「無」との弁証性を論証したのである。また、「無」の意味に関しては、次のように定義している。

無、能く数を制するとは何ぞや。無の義広し。然れども要を挙げて之を言えば、則ち其の有有らざるの謂いなり。……夫れ唯有せず。是を以て失わず。是れ数を制するの要なり。（『析玄』第四則）

と論じている。「無」を「不有の有」の意味に定義し、この「不有」を用いるのは、事物を処理するため或は数を制するための方法であるとした。これについて、工藤豊彦氏は、「かかる無を媒介とする制数論は、要するに無というものを手段として人生の目的を達成せんとする、いはば一つの方法論であると謂える。析玄における無は、老子の如き形而上学的な無を展開しようとするのではなく、寧ろ、日常卑近な処世の術としての無である……。」[11]と指摘している。ほかに、淡窓は「有」と「無」との関係からその存在論を論証している。『析玄』には、「玄は其れ易に本づく者か。易は数を言い、玄もまた数を言う。易の数を言うや、陰陽を以てす。玄の数を言うや、有無を以てす。易道は、陽を尊び陰を卑しむ。玄は則ち、有無互いに尊卑を為すなり。行事を以て言えば、則ち安静は無と為り、躁動は有と為る。悃損は無と為り、驕矜は有と為る。是れ尊無くして卑あり。いわゆる無を以て宗と為すものなり。……故に曰く、『有之れ以て利を為し、無之れ以て用と為す』」（第七則）と論じている。この「無の用」の論点は、『老子』の「三十輻一穀を共にす。其の無に当って車の用あり。埴を涎して以て器と為す。其の無に当って器の用あり。戸傭を鑿って以て室と為す。其の無に当って室の用あり」（『老子』十一章）の思想によって立論して、対立の面から事物の互いに依存しあう存在様式を表述したものであり、また或は「故に虚、実と為るゆえんなり。静、動と為るゆえんなり。一、多と為るゆえんなり。玄、明と為るゆえんなり。其の用測られず」（『析玄』第五則）と論じている。こ

れは老子の弁証法的な認識方法に即して展開したものである。

淡窓は『老子』の「玄」と「無」を解明すると同時に、「数」及び「制数」の思想を提出した。『析玄』第三則は、

それ数は有形の免れざる所なり。昼夜相代り、寒暑相推すは、数の天に在るものなり。高岸、谷となり、深谷、陵となるは、数の地に在るものなり。生ずれば必ず死あり、興れば必ず亡ぶあるは、数の人に在るものなり。但だ人は有心にして天地と科を同じくせず。故に定数の来たるや、其の行事に随って変ず。要は道を以てこれ（数）を制するに在り。もしそれ数を制して数のために制せられざるは、其れ五千言の作る所以なり。

と論述している。自然界と人間界にはみな「数」があり、「数」は事物自身の「量」であり、特に人間及び人類社会の「数」は変化するものであるから、事物を判断、処理及び制約することが、即ち「制数」である。だから、老子思想の主旨は「制数」に尽きており、それこそは老子が道徳経五千言を書いた目的である。また淡窓は、『醒齊語録』では、次のように論じている。

老子ノ学ハ、数ノ一字ニ帰スルナリ、天ニ昼夜寒暑アリ、人ニ生壮老死アリ、国ニ興廃盛衰アリ、皆是数ナリ、数ト云フ者、誠ニ理ツメナル者ニシテ、一分一厘ノヌキサシモノラヌ者ナリ、老子此数ヲサシテ自然ト云フ……。[12]

淡窓は事物のなかに含まれた「数」を、自然の数、或は万物自身が持っている数、定数、また「天与の数」と認め、かつこの数が事物の発展につれてだんだん消耗されてしまうとした。淡窓は「老子ノ本意ハ大ニ然ラス。寒暑昼夜ノ天ニアルノ数ハ。イカニモ人力ノ及フ所ニ非ス。生老壮死ノ人身ニアルカ如キハ。豈人力ヲ以テ変化スヘカラサランヤ。……故ニ老子ハ。聡明ヲ退ケ聖知ヲ断チ。専ラ無為ヲ尚フ。是精気ヲ養ヒテ長ク存センカ為ナリ。国家ノ気運モ。亦是ノ如シ。甚ク盛ナル時ハ。其数早ク満チテ。衰フルコトモ亦速カナリ」（同右）と論じて、事物変化の原因は事物の持つ「数」の消耗にあり、もしその「数」が満ちれば、その事物の衰亡することは必至だとしたのである。だから、事物の盛衰は、「数」の変化によって決定される。「数」が減少することから、事物が隆盛から衰微へと移行することを推定することができる。『析玄』には、次のように論じている。

盛極まれば則ち衰う。人皆之を知りて、盛の極は即ち衰の兆たるを知らざるなり、……是を以て数を制する者、

其のいまだ盛んならざるに及ぶなり。盛んになりて之を制するは晩し。況や其の衰に至るをや。（第七則）

淡窓が提出した「盛極則衰」の観点は、『老子』の「物壮則老」（『老子』第五十五章）の思想と一致するのであり、いずれも動態の観点から変化している事物を分析したものである。ただ淡窓はもっと積極的な態度をとり、数を制して且つ速かに制御することを主張し、早く数を制するのは、事物を把握し、国を治め、及び世に処するための重要な方法であると考えた。淡窓は、『析玄』第六則に、次のように論じている。

『語』に曰く、「山を隔てて煙を見、早く是の火を知る。これ魯人の為なり」と。敏なる者は則ち然らず。角を見て馬を知り、足を見て蛇を知る。夫れ良賈の貨を居むや、夏なれば裘を資し、冬なれば則ち葛を資す。早なれば則ち舟を資し、水あれば則ち車を資す。夫れ唯早く知る。是を以て其の数に先んじて之を制す。故に太上は数を制す。

このように「制数」の要領を強調した。これは客観的な実証的方法である。

淡窓は理性的な見方から存在論の問題を分析して、老子哲学の「無」の要素を導入、分析し、自分の「数」の理論と結びつけて、自己の哲学存在論を樹立した。淡窓の存在論の構造からみれば、直接『老子』の「道」（道体）を引用してはいないが、主に「形而下」（器）及び「道の用」の視点から出発して論述を行ったのである。周知のように、老子の「道」は老子哲学の最高的本体であり本原的存在である。老子はいう、「道生一、一生二、二生三、三生万物」（『老子』第四十二章）これは「道」の存在論的意義である。もう一つの意味は「天下の大道」「事物の条理と法則」であり、認識論的意義である。淡窓は当時の老子解釈の通義に基づいて後者の通りにした。勿論淡窓が「天」或いは天道観をもって自分の哲学的本体論としたことが主要な原因であった。淡窓が『老子摘解』に、首章の道を説明した時、「道トハ、人ノ行フベキ道ナリ。親ニ事ヘ君ニ事フルニ、皆相応ノ宜シキ所アリ。其仕方ヲ指シテ道ト云フナリ」[13]と述べている。老子の道を人間行動の原理と方法と認識したのである。このような解説は一般的に言えば、他の儒者の解釈と大きく違うものではない。『老子経国字解』の著者である金蘭斎、儒学者亀井昭陽らも、大体こういう風に注釈している。これは当時の通則である。また第十六章の「知常容、容乃公、公乃王、王乃天、天乃道、道乃久、

没身不殆」に「又天ノ万物ヲ容ルル理ニモ叶フナリ、天ニ叶ヘバ道ニモ叶フ。道ハ天地ヲ生ズル物ナリ、道ニ叶ヘバ、永久不滅ナリ」[14]と説明しており、これは老子の道の本義と一致するようである。要するに、淡窓は道を万事万物の原理とし、またそれを社会的倫理道徳の方面から論じており、道体について定義することはしなかったのである。

淡窓哲学の方法論は古いしきたりに固執せず、一家一派の定見に拘らず、敏活で生き生きとした弁証法的方法なのである。淡窓は鋭敏に老子哲学の方法論の価値に注意しており、「五千言は用世の術なり」と説いて、老子哲学と儒学とを比較して、老子哲学の特徴を指し示している。『析玄』には、「抑諸を画に喩うれば、六経は人、物を画くなり。繊細にして悉く備わる。歴々覩るべし。五千言は風雲を画くなり。草木委靡たるのみ。峰巒隠見するのみ。儒を以て玄を視る者、徒に草木を認めて風と為し、峰巒を認めて雲と為す。是れ果たして近からざらんや。析玄を作る」（第一則）と述べて、孔、老の違いを絵画に譬えて、『老子』が広くて深く、その変化が激しくて測り知ることができないと表すのである。淡窓は老子の「無為にして為さざる無し」の観点に賛同し、「無」をもって自分の方法論的原則としている。『析玄』には、次のように述べている。

性命は、我が重んずる所なり。今、我が性を養い、吾が命を保てば、則ち国家の務め廃し、物を絶ち生を偸む。仁者為さざるなり。吾が国を経め、吾が家を営めば、則ち性命の情病み、身を捨てて以て物に殉ず。知者為さざるなり。若し二者並び行われて、悖らざるを欲するか。宜しく無を以て之に処るべし。……此くの如くにして後、性命の情保つべし。国家の務め応ずべし。（第二十則）

淡窓はその著作の中で、大量の史実や社会問題を分析して、「人君、人臣、知勇の士及び闇弱の士」は、みな「無」を根本にすべきであると説き、「新造の国を治むる」「豊亨豫大の運に当」った際には、「宜しく無を以て之に処るべし」と説いた。『析玄』には、次のように「無為の事、不言の教」の妙用、またはその必要性を強調している。

古の善く玄を学ぶ者、豈に断じて施設する所無けんや。唯為す無きを為し、言無きを言う。万物を鼓舞し、我が意の如くして、人窺い得ざるなり。雍歯封じて反する者息む。四皓招いて太子安んず。是れ子房の玄に妙なればなり。陸賈遊宴して呂氏の謀沮む。田叔訟者を鞭ちて、魯王過を改む。……いわゆる無為の事、不言の教、数子

の若きは、之に幾しと謂うべきなり。（第十九則）

以上の淡窓が例をあげて説明した「無を以て之に処る」の見方は、事物発展の自然的な趨勢により、且つこれに巧みな導きを加えることで目的に達するための方法である。この道家流あるいは黄老の術を間接的に導入した事物を変えるための方法、または自然のままに沿った方法と、『老子』の「聖人は無為の事に処り、不言の教を行う」（第三章）「不言の教、無為の益、天下これに及ぶことなし」（第四十三章）などの論点とは一致するのである。それは自然の道を念入りに観察するための基本的方法であり、老子の「無為而無不為」という処世の方法の要領を深く得ているのである。

淡窓は老子のもう一つの「天下の先と為らず」の処世方法に非常に賛同し、『析玄』には次のように論じている。

易に曰く、「我童蒙に求むるに非ず。童蒙我に求む」と。敢て天下の先と為らず、亦人をして我に求めしむるの謂いなり。堯、既に舜の聖を知る。然るに群臣交薦するを待ちて、後之を挙ぐ。君道、宜しく先と為るべからざるなり。伊尹天下を以て自ら任ず。然れども三聘の後、始めて起つ。臣道、宜しく先と為るべからざるなり。孔子「憤せざれば啓せず。徘せざれば発せず」と。師道、亦宜しく先と為るべからざるなり。……人に先んずる者、人に求む。人に後るる者、人より求めらる。人に求むる者、人より制され、人より求めらる者は人を制す。故に曰く、「敢て天下の先と為らず。故に能く成器の長たり」と。（第十四則）

ここで淡窓は、『老子』の「先と為らず」の思想に対する透徹した分析を行ったばかりでなく、人と人との協力関係への対処の態度、方法などの方面をも考察している。

淡窓は世人の老子学説に対する誤解に対して駁論を加え、且つ「玄」（或は数）の方法論を論証した。『析玄』には、「或る人云う、『玄の術たる、退有りて進無し。是れ陰道なり』と。夫れ進むに当たりて進み、退くに当たりて退くは、古今の通義なり。玄聖、独り之を知らざらんや。其の意乃ち数を窮め変を推し、造化を挽回するにあり。特に知者の為に之を言う。豈に通義を以て論ずべけんや。後人有を以て陽に配し、無を以て陰に配す。故に玄、陰道を宗とするの説有り。それ玄、易に近しと謂えば則ち可なり。玄即ち易と謂えば、則ち不可なり。易を以て玄を解するは、玄を

以て玄を解するに如かざるなり。」（第二十六則）と論じている。淡窓のこの批判的な論説は当時において、実に勇気ある発言であった。また、易と玄（無）の認識論における方法上の異同を強調したのは、重要な思想的価値があると思われる。ほかに、淡窓は「無」「無為」及び「不為天下先」の作用を論じていて、そして「故に善く玄を言う者は、辞を以て意を害せず。豈に唯玄のみならんや。……無為不言は面壁静坐に非ざるなり。敢えて天下の先と為らず。豈に遅緩にして期を失うの謂いならんや」（『析玄』第二十則）と結論している。

以上論じたのは、淡窓哲学の方法論の社会歴史観の方面における運用であった。続けて淡窓の方法論の一般的な基本概念及び学問観における意味を論じてみたい。もし以上論じた「無」「無為」「不先」などの理論が淡窓の方法論の特徴であるとすれば、「変」は彼の方法論のもう一つの重要な特徴である。淡窓は一家一派のきまりきった或いは一本調子の方法にこだわらず、敏活で変化に富んだ方法で様々な問題を分析したのであり、かつ事物の存在している静止の状態からだけでなく、事物の運動、変化のなかから事物の性質及び特徴をつかんだのである。したがって事物の法則に合う結論を下し、このような「変化」（多様化）の観点より出発して、万物、社会歴史、倫理道徳、学問知識及び人生実践を分析したのである。例えば、淡窓は自分の「窮理」と宋儒の「窮理」との違いを述べるときに、「予が意は天を敬いて、其の理を極めざるに在り。宋儒の天を説くは、其の條理整然として、碁局画路の如きを欲す。予れの天を説くは、其の変幻不測、双陸骰子の如きを欲す。是れ同じからざる所以なり」[15]と述べて、自分の学術の観点を広々とした視点に置いている。また自分の学術とその方法とについて、次のように論じている。

問いて曰く、先儒の学には、窮理を主とする者あり、良知を致すことを主とする者あり。今敬天を以て宗と為せば、則ち彼は皆非なるか。答えて曰く、何為れぞ其れ然らんや。教を施す者は、機に従うを主とし、徳に入る者は、門を得るを貴ぶ。機は固より一端ならざるなり。物を玩び義を忘るれば、則ち之を喩すに義を以てす。而して物随って挙ぐ。義に執し物を廃すれば、則ち之に示すに物を以てす。而して義自ら存す。門も亦た一方ならざるなり。王城の門は十二なり、苟くも其門を得て入れば、以て宗廟の美、百官の富を窺うべし。……掲げて以て人に示す。亦た可なざるや。[16]

と。淡窓の「随機」の観点は、教育家として常に運用した教育方法だけでなく、また淡窓の敏活な、形式に拘らない学問観とその方法でもある。また淡窓は常に目的と手段との関係に論及している。例えば、程朱と伊（仁斎）物（徂徠）の説が同じでないこと、その義の辨について分析するときに、「喩へば上京する者が、或は陸より、或は舟よりするが如し。二つの者。各其利害あれども。歸宿する處に至っては一なり」[17]と言っている。ここでは、同じでない学術の方法が、適宜に運用されて現れてくる。だから、上述の「変」の観点は、淡窓の方法論のもう一つの特徴なのである。

淡窓が「無」と「変」との観点から様々な問題を分析して、変化中の事物を把握するのは、朱子学の方法論とは異っている。朱子学の方法はしばしば「理一分殊」のような、一般（普遍）から個別（特殊）へと至る路線をとる。しかし淡窓のそれは、様々な方法、多様化の考案によって事物の多種の性質を把握し、統一的な結論を作る、即ち個別（特殊）から一般（普遍）へと至る認識路線なのである。

三、儒老一致の提唱

淡窓は若いころに諸子学をもって学者の列に入り、古典の風格で儒学学説を解釈すると共に、老子思想を深く研究し且つその影響を受けることによって、自分の思想の基調を形成してきた、晩年には、儒者をもって自ら任じてはいたものの、老子思想に対してさらに深く認識することがあったので、初めて儒老一致を提唱した。『析玄』には、次のように論じている。

老聃は礼を仲尼に伝うる者なり。乃ち曰く、「忠信の薄きなり」と。後儒遂に、其の一人に非ざるを疑う。夫れ神聖言を立つるに、変に応ずるに方無し。……大蔵八千、其の説瓜分し、権実大小の同じからざる有り。何ぞ独り老に於て之を疑うか。……蓋し尼父六経を伝う。亦老の志なり。玄者言有りて曰う。孔子は道の顯を伝え、尹氏は道の微を伝うと。其の言誇なりと雖も、亦義有りて存するなり。衆人固必の心、以て神聖の旨を測るべから

ざるなり。（第二十七則）

淡窓は中国古代典籍から手をつけ、儒老両学説の論義の広汎性を分析し、両者の内容の間にある共通性を指摘した。また、儒老両派の思想のもつ実践的結果に対して、それが相互に補完関係にあること、及び両者の実践作用が同じであることを認めていた。

儒老思想における内容の共通性については、淡窓が「夫れ我が邦の黄白焼錬の説、符呪齋醮の務と与に、概ね聞ゆるなし。而して道徳一経、独り儒流の所摂たり。これ反て其の真に近きか」（『析玄』第一則）と述べて、歴史上儒老両派の学説が融合したこと、あるいは儒家が道家思想を受容したことをはっきり指し示した。この点については、近人の陳鼓応氏は中国古代思想における「道家主幹説」を極力唱道した。[18] 淡窓が百余年前にすでに「儒老融合」あるいは「儒学の中に老学の成分がある」という問題に注意していたことは、非凡な見方であると言わないわけには行かない。また、淡窓は、『燈下記聞』に、次のように論じている。

或るひと孔老の異なる所を問う。曰く、孔氏は陰陽の上に就きて見を起つ。天下の事物、皆析ちて両と為し、是に非らざれば則ち非なり。利に非らざれば則ち害なり。我人の為す所は、唯だ是れ非を捨てて是を取り、害を去りて利に就くのみ。所謂道なるものは、取捨去就の方のみ。老子は大極の上に就きて見を起つ。是非利害は、本より皆根を同じうす。是の中に非有り、非の中に是有り。利の中に害有り、害の中に利有り。得て分別すべからず。我人は虚無因循し、心力を労せずして、方めて道に合す。孔氏は理の表を見、老子は理の裏を見れる者のみ。[19]

と。ここには、孔老の認識論は同じではないが、思想学説の結果（哲学の目的あるいは指向性）は一致するとされていたのである。

また、儒老両派哲学における作用の一致性については、同書に、次のように述べている。

儒教は理を主とし、悪を去りて善に就く。書に曰く、迪に惠へば吉にして、逆に従へば凶なりと。是れなり。道教は数を主とし、盈を損して虚に就く。書に曰く、満は損を招き、謙は益を受くと。是れなり。（同右）

ここで淡窓は、儒教の善悪観によって吉と凶という実践的な結果を分析し、道教の「盈虚説」に従って数の消長変

化を考査し、『書経』の言葉で迪、逆、満、謙という実践とその吉、凶、損、益という結果とを結びつけ、それら相互の影響と、変化を与えた状況を明らかにした。すなわち実践上においては事物の中の理及び数の変化であり、且つ両者の作用と哲学的意義は同じであると認識したのである。

淡窓は儒教の主経典たる『易経』の乾坤について、世界を簡易に区別したその哲学様式を、『老子』の「無為」「不言」と比較して、両者の帰着点が同じであることを指し示した。すなわち『六橋記聞』の中で、次のように論じている。

我が先王の礼を制るや、漢唐に淵源す。……今時は昭運に属し、文学は再び興り、儒者、皆腕を制作に扼す。……制作は豈に言ひ易からんや。姑く人情の安んずるところに従うに若かず。易簡を以て物を御め、以て後の聖人を俟つなり。予れ是に於いてか、深く無為の説の時に協うあるを知れり。故に其の旨を剖析し、以て学ぶ者に便にす。易伝に曰く、簡なれば則ち従ひ易く、易なれば則ち知り易し。孔老の言、何ぞ曾つて同帰せざらんや。（巻八『析玄外篇』末則、『灯下記聞』第九十頁）

淡窓は「無為」「不言」の作用を大いに賛嘆し、しかも儒教の礼楽制作（あるいは社会の運行と管理）が「簡易」の原則に従うことは当然であるとして、実践の面から両者のつながり及び帰着点を説明して、両派の学問の研究対象の面から、両者の間の共通性及び融合性をも示したのである。

おわりに

本稿は淡窓の老子観に対して一つの簡略なまとめを行って、淡窓思想のある特質を説明しようとしたものである。主にその存在論、方法論、儒老一致説などの視点から検討を加え、淡窓の『析玄』『老子摘解』『六橋記聞』『醒斎語録』などの学術著作、日記の中の老子への論及と『老子』書に関する論議とを分析し、かつこれと老子思想とを比較して、それによって淡窓思想と老子学説との関係を説明しようとしたのである。淡窓の学術論議は比較的広汎である

が、その中でも老子思想に対する評論は非常に特色を備えている。同時に淡窓の老学に対する素養の厚さをよく顕示している。これは『析玄』を著したことばかりでなく、彼の人生修養の実践においても表現されている。たとえば、淡窓は若いころから非常に老子を傾慕して、深く老子の教えに浸っていた。塾教師となっても自らを儒者とは認めず、ただ詩人をもって自ら称し、[20] そのうちに、老子の「自ら隠れ、名無きを以て務めと為す」の趣を表した。中年以降老年までの間に、自分では儒林に帰するといったものの、老学の造詣は円融の境地に達しているのである。

淡窓の老子思想は主に「制数論」であり、「制数論」と淡窓の儒学主著『約言』及び『義府』とは共にその哲学の骨組みを構成しているばかりでなく、その存在論及び方法論にきわめて大きな補足をも行なったのである。淡窓は「数」と「制数」思想によって万事万物の発生、発展を分析し、且つ事物の中の数に対する制御を通じて、事物の発展を把握することにまで達したのである。そして、この理論をもって『易』と『老子』の間の共通点を発見し、二大思想の融合を主張しているのである。淡窓の老子流の方法論は彼の学術の基本精神を代表するものである。これと淡窓哲学の折衷的性格とは非常に一致する。淡窓は一家一派の思想の不足しているところに鑑みて、各派思想の融合、革新を主張した。淡窓は「無」（或は「無為」）をもって「用世の術」としている。そして、「無」によって内は自身、外は天下国家の政務のような広い範囲に対処し、実践の上でその妙用が十分に具現されるという自信を持っていたのである。

淡窓は鋭敏に老子哲学の価値を発見し、且つ老子思想を自分の哲学に導入して、自己の思想体系を打ち建てたのであった。それは近世後期思想史上における一つの特殊な哲学様式であると言えよう。

〔注〕

（1）淡窓が青年期に読んだ『老子国字解』について、三澤勝己氏（「広瀬淡窓研究史試論」――『国学院雑誌』第八十六巻、第六号、一九八五年）は、金蘭斎の著と推定した。金蘭斎の『老子経国字解』（三巻）は寶暦十一年の刻本がある。のちに関儀一郎編『老子諸註大成』（井田書店刊行、一九四二年）に収録。

(2)『六橋記聞』巻五、第四十一頁。(『淡窓全集』上巻)

(3) 工藤豊彦氏は、「淡窓の老子研究の足あとは、大体三期に分けて考えることができると思う。すなわち、少年十八、十九歳のころ、始めて『老子』という書を読んで、たちまちこれに心酔し、その後二十余年の間、ひたすら『老子』に傾倒した時代を第一期とする。ついで、『自新録』・『約言』・『約言或問』・『再新録』の著作された十数年間は、もっぱら孔子の儒学を尊び、天命を信じて敬天を説いたが、反面老子研究からは遠ざかった時期であり、これを第二期とする。しかして、『析玄』の起稿された五十五歳以降、その没年に至るまでの二十年間を第三期とする。この時期には『析玄』・『老子摘解』・『読老子』が著わされたのであり、これは淡窓の老子研究の専著の完成したときである」と論じている。(『広瀬淡窓・広瀬旭荘』第百二十二～第百二十三頁。)筆者も工藤氏の区分に従い、考察を行うものである。(文中の『読老子』(一巻)は、工藤氏が昭和三十七年十月に発見したもの。『老子』の全八十一章を対象とした本格的な注解書である。淡窓の晩年の著と推定している。同書第百十九～百二十二頁を参照。)

(4) 工藤氏前掲書、第百十八頁。

(5)『灯下記聞』巻三、第二十九頁。(『六橋記聞』(十巻)の前三巻)

(6) 工藤氏前掲書、第百十八頁～百八十九頁。

(7)『再新録』(一巻)、『自新録』の続編、天保六年五十四歳の時の著。(『全集』上巻)

(8)『醒斎日暦』巻十二下、第六百二十五頁、天保七年十二月二十五日の條。『醒斎日暦』は淡窓五十歳(文政十四年)から五十九歳(天保十一年)まで書かれた日記。(『全集』下巻)

(9)『燈下記聞』巻一、頁一。

(10)『懐舊楼筆記』巻四十、頁五百三十～五百三十一。(『全集』上巻)

(11) 工藤豊彦氏「広瀬淡窓の老荘学について」(『大分大学学芸学部紀要』第四号(人文科学)一九五五年)

(12)『醒齊語録』巻一、頁七～八。(『全集』上巻)

(13)『老子摘解』巻上、一頁。(『全集』上巻)

(14) 同右、第十九～二十頁。
(15)『六橋記聞』巻十、頁一一三。
(16)『約言補』第十二則。(『全集』中巻)
(17)『夜雨寮筆記』巻一、頁八。(『全集』上巻)
(18) 陳鼓応著『老荘新論』(上海古籍出版社・一九九二年)
(19)『燈下記聞』巻三、頁二十一。
(20)『夜雨寮筆記』巻三、頁三十七。